

【問題】(演習)

出典：『御伽草子』(うたたねの草子) / 明治大学・04年

現代語訳

はつきりと御覧になった昼寝の夢も、そのなり行く先も知りたく、それにしても美しく、見る価値があるほどだった(男君の手紙の)筆跡も、お心にかかって、しみじみと物思いにふけていらっしやるうちに、やがて日も暮れていったので、灯火をともしなさないことだけが、何となく気がかりに思われなざるのが、我ながら不思議な気がしなざる。(姫君は)何やかやと遊びに興じるが、大層物思いがつのるので、近くの御几帳を引き寄せて、うとうとと仮寝なさるようにおやすみになる(その)側に、少し糊気が落ちて柔かく見える直衣に紅色の着物を重ねて(着て)、紫苑色の指貫で、色もつやも並々でな(く美し)い指貫が、香りが強く染みこみ、(その香りが)姫君御自身にまでにおい漂いかかる気がして、(男君が)たいそう馴れ親しそうに姫君に寄り添い臥している(姫君は)御胸がどきどきして、ふと見上げなざると、あの昔語りで評判の高い光源氏の君も、これほど美しくは(あろうか、いやあるまい)と、思われるほどにまで、輝くように美しく温和で魅力的で、その上しつとりと落ち着いて物静かでない(あつみじみとした趣も加わって、多くのなまめかしさは、まことに男性も備えていたのだなあと、言葉には言い尽くせないほど御気持が乱れなざるけれど、ただ思わずよよと泣いてしまえばかりで、お声も出ない。(男君は)ちょっと体を動かそうとする(姫君の)お手をとらえて、「それにして、思い余って(『我慢しきれない』私の(恋)心のさまは、そうはいってもかわいそうだとわかってくださってもよいのに(それもなさらず)、取るに足りない手紙までも(あなたは)御覧にならないのでしょうか。一行のお返事さえも見せ(『書い』てくださらない恨めしさに、こんなにお側近くにまで参上したのを、せめて(古歌あるように)『あなたを思う恋心には堪え忍ぶ心が負けるという習慣で』とだけでも、やはりわかってくださらないのでしょうか(わかってくださいよ)。あれこれするのも、現世だけでな

い(前世から結ばれている男女の) 因縁であるので、逃れることのできない前世からの御因縁とってお許しください。ひたすら心の晴らしようのないような(恋の) 思いの結末は、かえって報いが恐ろしい例も多くありますので、私もあなたも、現世では、つまらない浮名を流し、死後の世界ではいつまでも成仏できないで終わるといふ縁も、恨めしくはお思いませんか」など、まったく真似ることのできないほど、くどくど言うので、(姫君は) お返事もどのようにならぬかとお思いになるけれど、女(姫君) もそうはいってもやはり非情だとは思われたくないと、お思いになるのだろう。

解答

問 1 1

問 2 B 〓のうし C 〓さしぬき

問 3 4

問 4 仮寝をするようにおやすみになっている姫君のそばに、

問 5 4

問 6 筆の跡(1行目)

問 7 2

出典：『御伽草子』〈室町物語〉／東京都立大学・前期日程

現代語訳

「私は東国へ急ぎ旅をしている僧侶です。どういう御用でございましたでしょうか。早く早く（おいとまさせていただきたい）」と（西行法師が）おっしゃると、姫君が（縁側まで）出ておいであそばして、（それが実の父とはつゆ知らず）「なんて気が引けることでしょうか。あのう、お坊さま、この家を御覧になって、荒れ果てて、人が訪ねてくる道も（草が茂ってもうはつきりとは）見えなく（なっていることを）、呆れたこととお思ひあそばしていらつしやることでしょうか。けれども、（私は）父には生きながら取り残され、母には死に別れて、もう三年になり、あの刑部（という家来）だけを頼りにしておりますけれど、（先ほどのあなたさまへの御無礼のことを思えば、刑部はこの家に）いても（ただいるだけで）頼りにならないあります。それにしても（刑部ったら無礼にも）思いやりもない態度で（尊い）修行者の方に御応対申しあげたことです。家に役に立つ（孝行な）子がいれば、必ずその家を大切に守ります。国に（その諫言を君主が）採りあげる守護がいれば、必ずその国は穏やかです。（そのように役に立つ家来がいればよいのですが、あいにく）この家ではみなし子となつてしまつて、私ひとりでございますから、どんな（無礼な）間違いをもお許しくださいます。それに付けても、申しあげたいがございます。西国（で）修行（してこられた）とおっしゃいますと、（その間に）九州の九カ国の中でどこかで、鳥羽院の御所に（お仕えしていた）佐藤兵衛義清・法名を西行と申す人（お坊さまは今までに）会つておいでになりますか。（私にとつては）恋しい（人の）ことですから、夜も昼もその（西行法師からの）消息（が届くこと）をお祈り申しあげているのです」ということを（姫君は西行法師に）お話しになつて、袖を顔に押し当ててお泣きになるので、西行は（姫の話をお聞きになつて、「それでは（わが）妻もお亡くなりになつたのであろうか。両親に取り残されて一人で暮らす孤児が、それでもやはり父のことを大切に思つて、こうして問ひ訊ねるのだなあ。『その父だ』』と言いで（私が）名乗ればさぞかし喜ぶにきまつているが、かわいそうに」と思ふのだが、「（いやいや、出家した自分が肉親の情にほだされて）気弱になつては（仏道修行は）成就するはずもない。どうしても（互いに親子の名乗りを挙げて）対面することはできるわけがないのだから、『その人なら』もう死んでいる」といふふうに言つてやろう」と思つて、声を（わざと）荒々しく張り上げて（かぶつていた）笠を傾け（顔を隠し）、「私は修行を七、八年続けてま

いりましたが、『義清』と（いう名前）は聞いたこともございません。（ただし）去年の秋のころ、豊後の国のこと島の村里を通りかかったときに、新しい卒塔婆がありました。立ち寄って（その卒塔婆を）見ると、『諸行無常』という文章が書いてあって、（その）下に『故・西行』とありました。『これは聞いたことのあるような名前ですな』と（私が）近くの人に尋ねてみると、『都の（出身の）人ということ、九州を（経巡って）修行していた人で、西行と言って、今日から五、六日前にこの村でお亡くなりあそばしたのでございます』と教えてくれたものです。あんまりお気の毒に存じまして、（私もそこに）その日はしばしとどまって、お経を上げ、念仏をとなえてそこを離れました。（お訊ねの人が）その人のことでしたら、現世で会うことは（もう）できるはずありません。（せめてその人の）菩提をお弔いなさい」と（西行はわが娘に）お話しになる。

姫君は（西行の話を）お聞きあそばして、「今の話は夢か、現実か、幻か」と（言つ）て（その場に）倒れこみ、（それを見ていた）侍女たちも（家来の）刑部も流れ落ちる涙が（あまりの悲しみに）焦がれるようで、（そんな中で姫君は）袖を顔に押し当てて、お泣き悲しみになった。（その様子に接した西行も）「姫はまだ（成人の）御年齢にも達してはおいでにならず、数えで（わずか数えの）九歳におなりになる。（そんなに幼いのに）これほどまでに親のことを心から悲しんでいることだなあ。子でなくては、どここのだれが、これほどまで（親の死を悲しんで）嘆いてくれるはずがあるうか（いや、子だからこそその悲しみなのだ）」と（涙で濡れた）袖をお絞りあそばすのだった。姫君は、しばらくすると、御簾の中（の奥まった部屋）にお入りになって、唐櫃の蓋（「広蓋、お盆のように入れ物としても用いる」）に僧衣と袈裟と柿本人麻呂の肖像画をお入れあそばして、自分の手で持ち、西行のおそばへお近寄りあそばして、涙ながらにおっしゃったことには、「（この僧衣は）私の母が、父のためにと（言つ）て作ってお置きあそばして、『どこからでも（いいから）消息があったらお送りしよう』と思っただけなのですが、（その母も）一昨年秋のころ、お亡くなりあそばしたので。また、この袈裟は私が作って置いて、『父上の（行方（の報せ））でもありましたら、お送りしよう』と思っただけなのに、それでは、（父は）お亡くなりになったのですね。この人麻呂の絵は、（父が）たいそう大切に持っておいでで、（歌道の先達として）尊んでいらしたのですが、（ある方への）どうしようもない恋のために気が落ち着かず、（それを契機として）出家の決心をなさって、内密に慌てて（出家の）準備をしておいでになるうちに、（その慌ただしさに紛れて）持ってゆくのをお忘れになったのを、『いい加減に扱わないようにしましょうね』と母上が（私に）お教えおきあそばしたものです。どこでも（かまいませんから）西行という人がおいであそばしたなら、これ（僧衣と袈裟と人麻呂の絵と）を（その西行という人のところへ）持っていらして、渡してくださいませ。また、もし西行は（お坊さまの）お言葉のとおりにお亡くなりになっていますのなら、（お坊さまが）そこ（西行の墓所）にお参りされ

まして、(父の墓を) 御覧になるようなときには、お経をも(あげて) くださり、念仏をもおとなえして、(父の) 菩提を弔ってくださいませ。(それにつけても) ほんとうに、(お坊さまは) 父上がふたたびまた(帰って) おいでになったのだと思わないわけにはまいりません。なんて慕わしいお坊さまでしょう」と(言っ) て、(姫は西行の) 傍らに倒れ伏し、御袖にすがりついて、お嘆き悲しみになるので、(それを見れば) どんなに賤しい(もの)のあわれもわからぬ) 下男下女までも(涙の) 袖を絞らない者はいなかった。まして正真正銘の父である西行の胸の内を思いやらずにはいられず、胸を打つほど悲哀を感じるものだ。(家来の) 刑部も、そのほかの侍女たちも、みな涙を流していた。

解答

問1 a 〓候へ b 〓候へ c 〓候は d 〓候は

問2 両親を失って家来も頼りにならず、後見役のいない心細い様子。〔29字・解答例〕

問3 B 〓私とこの娘はどうしても互いに親子として対面することはできないのだから、「西行という人ならもう死んでいる」ということにしてそのように言おう。

D 〓子でなくては、どこのだが、これほどまで昔別れた父親の死を嘆き悲しんでくれるはずがあるか、いや、子だからこそ
の悲しみなのだ。〔いずれも解答例〕

問4 自分の悲しみを隠し、また自分の顔を娘に見られて気付かれないようにするため。〔解答例〕

問5 仏道に帰依して出家する決意。

問6 (オ)

問7 出家して捨てた自分の幼い娘が母にも死別して心細く父の消息を求めているのに父と名乗れず、父は死んだと告げたときの娘の激しい嘆きに接した、どうにも切なく辛い心情。(79字・解答例)

解説

問1 「候ふ」は八行四段活用動詞。空欄の下はすべて接続助詞の「ば」であるので、未然形(順接仮定条件)か已然形(順接確定条件)にすればよい。aの直前の副助詞「ばかり」は限定で、「自らばかり」は「私一人だけ」の意。孤児になった姫君が自分の置かれている状況を語っている場面であるので、確定条件(ノデ)。後文の文末が命令形であるからといって安易に仮定条件にしないこと。bを入れるには冒頭の西行の会話に注目。西行(素性は明かしていないが……)は「東国へ急ぐ沙門なり」と言っている。とするならば、「西国修行」を既にしていたのである。後に続く記述で「西行に会っておいでになりますか」と尋ねていることから明らかであり、ここも確定条件(ト)。cを含む「」は姫君の母(西行の妻)の会話。その母が、「西行の行方がわかったら(作り置いている袈裟を)送ろう」と言っているのである。cは未然形に変えて仮定条件、後文に未来の時制を表す助動詞「(参らせ)む(ん)」があることもヒント。最後にd。西行が亡くなっていると聞いてはいるが、実際に亡くなっているかどうかは、姫君はまだわかっていない。従って「もしお亡くなりになっていますならば」の意が適切で、ここも仮定条件。

問2 傍線部Aは、直接的には刑部が頼りない有様を示している。だが、それが何を意味しているかをもう一歩突っ込んで考えるべき。姫君は父に生き別れ、母にも死に別れており、刑部だけを頼りに生活をしている。しかしながらその刑部も頼りにならないのである。とするならば、ここは姫君の困窮して心細い様子であることを記述した方が正確であろう。

問3 まずはB。副詞「とても」は本来〈どちらにしても・どうせ〉の意だが、打消の語(ここは不可能の助動詞「まじき」を伴うと〈どうしても・とうてい〉の意になる。「ものゆゑ」で逆接の接続助詞もあるが、ここは「もの／ゆゑ／に」と品詞分解して、〈〜という理由で・〜なので・〜だから〉と訳す。「はかなく成り」は入試頻出の慣用表現で〈死ぬ〉の意、完了の助動詞「たる(たり)の連体形」も忘れずに訳出すること。「ばや」は未然形に接続した自己の願望の終助詞(〜たいものだ・〜たい)だが、意志のように訳すとうまく行く場合もある。さて、設問条件をみると、傍線部の人物関係をはっきりさせて訳す必要がある。リー

下文からも明らかのように、西行は顔を隠し、素性を隠して娘と対面している。とするならば、ここは西行が娘と「他人である僧と娘としてではなく」親子として」は対面できないでいるのだという記述が必須。また、それゆえに「はかなく成」ったのが「西行（他人になりすましてはいるが、実は自分のこと）」であることも明示せねばならないだろう。以上の点がしっかり書けていればよい。

次にD。「子／なら（断定の助動詞）／ず（打消の助動詞「ず」の連用形）／は（係助詞）」は、直訳すると〈子でないならば〉となる。「ず＋は」で仮定を表すことに注意すること。「いづれのもの」は〈いったいどの誰が〉ということ。係助詞「か」の結びは文末にある当然の助動詞「べき」で、疑問表現「いづれのもの」と併用されて反語の意になる。反語の訳出は、必ずそれがわかるよう、「いや、……」以下をきちんと記述すること。あとは文構造を確認し、「嘆き思ふ」が他動詞なので、その目的語（＝か）つて生き別れた父の死）を補えばパーフェクトである。

問4 傍線部は、自分の素性を娘に隠し、自分が死んだと偽る西行の心情を読み取る問題。傍線部より後を読むと、西行自身が「西行は死んでしまった」と語っている。西行が「笠を傾け」たのは、自分の顔を娘に見られて気付かれないようにするためである。また、傍線部の前には、「自らの素性を明かせば仏道修行の妨げになるので、『西行はもう死んだ』と言おう」という、仏道に帰依する西行の決意が語られている。そうはいつても、目の前にいる娘をかわいそうに思わないわけにはいかないだろう。「笠を傾け」たのは、嘆く娘を前にしながらも敢えて自らの素性を隠さねばならない西行の、悲しみを糊塗しようとする行動でもあったのである。

問5 これは古文常識単語。仏教思想に彩られた古文ではよく出てくる単語なので、知らなければ今のうちに覚えておこう。

問6 言語表現の問題。「いかなる」は〈どういう・どのような・どんな〉の意であるが、その使用される文脈は自ずと限定される。すなわち、①疑問文を形成する②逆説仮定の条件節を導く③②の変形で）打消と呼応するという形である。イメージしにくければ現代語で考えてみるといいだろう。

〈例〉

① いかなる運命が待ち受けているのだろうか。

② いかなる事情があろうとも、出かなくてはならない。

③ いかなる時にも慌てて行動してはならない。

さて、このことを踏まえて本文を見てみよう。傍線部の直前は「いかなる賤の男・賤の女までも」とあり、ここは③の用法である。ところが、傍線部自体は「袖を絞りけり」となっていて、肯定文で受けている。この部分を打消文にする必要がある（この時点で選択肢は(エ)か(オ)に絞られる）わけだが、単に打消の語を添えたのでは、文意が逆になってしまう。そこで「打消+打消」という二重否定の形にする。これによって〈どんな賤しい下男下女までも（涙に濡れた）袖を絞らない者はいなかった〉となり、文としての不自然さは解消される。

問7

字数が多いので、傍線部に至った経緯・原因を時系列・因果の順に従って再構築しつつ、心情を説明すればよい。つまり、「西行自身が実の娘を捨てて出家した」↓「娘は母にも死別し心細い生活を送っていた」↓「西行はその娘と対面したが、自分が父だとは名乗れなかった」↓「父は死んだと娘に告げた」↓「娘は激しく嘆いた」↓「その嘆きに接した時の、実の父である『西行の心のうち』」↓どうにもつらく切ない心情」というフローをまとめればよい。主語——述語や修飾——被修飾の対応などに気をつけ、同一の要素をまとめながら解答を作成しよう。

《補充問題》

現代語訳

問1 (1) まるで別人のようになってしまった。

(2) 険しい道に落ちては死にたくない。

(3) 少しのことにも指導者はあつてほしいことである。

問2 (1) 家にあつてほしい木は、松と桜だ。

(2) 人が子を産んだ時には、男の子か、女の子か、早く聞きたい。

(3) 花というなら、このように薫ってほしいなあ。

解答

問1 (1) ごとく (2) たから (3) まほしき

問2 (1) 家にあつてほしい木

(2) 早く聞きたい

(3) このように薫ってほしいなあ

●
メ
モ
●